

ベオグラード 2022 世界室内陸上選手権帯同報告

田原 圭太郎

多摩総合医療センター 整形外科

1. はじめに

ベオグラード 2022 世界室内陸上選手権は 2022 年 3 月 18 日～3 月 20 日の日程でセルビア・ベオグラードにおいて行われた。コロナ禍における海外での国際大会への派遣であったが、世界中でワクチンの接種が進み、これまでのデルタ株から重症化の少ないオミクロン株に置き換わったことで、新型コロナウイルスに対する概念が変化しつつある中での海外派遣であった。日本でも 2022 年 3 月 1 日より渡航後の隔離期間が大幅に軽減され、これまで 1 週間の隔離期間が必要であったところが、3 回のワクチン歴があれば指定国でなければ隔離期間はなく、2 回の接種であれば 3 日間の隔離期間に変更された。セルビアは指定国ではなかったため、ワクチンの接種歴に応じて「隔離期間なし」あるいは「3 日間の隔離後に PCR 検査の結果が陰性であれば隔離期間終了」のいずれかであった。3 月 14 日に成田空港に集合し、同日に PCR 検査を受け、陰性を確認後に渡航した。

選手団はスタッフ 5 名（1 名は添乗員）、選手 7 名（男子 5 名・女子 2 名）の総勢 14 名で結成され、その内メディカルサポートとしては医師 1 名トレーナー 1 名が帯同した。

2. 派遣前準備

事前に選手へメディカルアンケートを送付し、選手のコンディショニングの状況や怪我の有無、内服薬やサプリメントなどのチェックを行った。選手から申告されたサプリメントに関しては医事委員会のスポーツファーマシスト 3 名の協力を頂き、アンチ・ドーピングに関する安全性について調べた内容と共にサプリメント摂取の基本 8 ケ条を添付して選手へメールし情報提供を行った。事前に大きなケガや故障の報告はなかった。

出発 2 週間前に発熱した選手がいたため連絡をと

り、近医での抗原検査は陰性、発熱は 1～2 日程度でその後の他の症状も含めて体調に問題はなかった。出国時の PCR 検査も陰性であった。

新型コロナウイルス対策として示された Medical Clearance Protocol には全体的なルールとセルビア渡航前から入国までの注意点、滞在中の検査方法、Covid-19 検査陽性の場合の取り扱い、ホテルやトレーニング施設・競技会での注意点、出国における留意点が記載されていた。マスクは FFP-2 または KN95 が推奨されていたため、事務局の方で全員の N95 を用意して持参したが、通常の不織布などのマスクでも変更を求められることはなかった。検査に関しては、出国 48 時間以内の RT-PCR 検査は全員が必須で、滞在中は High COVID-19 Protected か Low COVID-19 Protected かで対応が異なっていた。High COVID-19 Protected は、2 回目の接種が半年以内でかつ 2 週間より前に接種している、3 回目の接種が完了している（最終接種後 6 か月以上経過していても構わない）、6 か月以内に COVID-19 に感染し回復したという医師の証明がある、のいずれかに該当するものと記載されており、滞在中の検査は不要であった（*ちなみに、世界中では 3 回目の接種を実施している最中であった）。Low COVID-19 Protected は、ワクチンの接種歴がない、ワクチンの接種歴が証明できない、2 回目の接種から 6 か月以上経過しているか接種後 2 週間経過していない、のいずれかに該当するものと記載されており、滞在中 48 時間毎の検査（LAMP test）を求められた。

2022 年 1 月より糖質コルチコイドはすべての注射経路が禁止となった。これまで行われてきた関節内、腱鞘内、筋肉内、硬膜外などへの投与は TUE 申請が必要になったため、TUE 申請書を数枚持参した。



写真①



写真③



写真②

3. 渡航および現地の状況

世界的にも新型コロナの流行は収まっていなかったが、ワクチン接種が進んだことや重症化リスクの低いオミクロン株に置き換わったことなどで状況はかなり変化していた。しかしながら、ヨーロッパは日本より感染状況が悪く、セルビアも例外ではなかった。セルビア（人口約690万人）では渡航期間中において1日平均2000人前後の感染が確認されており、日本の感染状況より人口当たりの感染者数

は多い状況であった。大会は厳密なバブル形式ではなく、ホテルと競技場は指定のバスを利用していたものの、近隣への外出は可能であった。ホテルには手指消毒用の器械が様々なところに設置されていた。食事はビュッフェスタイルで自ら皿に盛りつける通常の形式（写真①②）となっており、トングは共有でビニール手袋等の設置はなかった。マスクなしで会話をしながら盛り付ける他国の方も散見され、新型コロナウイルス感染予防対策としては不十分ではないかと感じた。テーブルや椅子の設置は通常の円卓に座って食事をする形式であり、特に新型コロナの感染対策はなされていなかった（写真③）。食事の内容に関してはパンやパスタ、肉料理、魚料理、野菜が並べられており、特に問題はなかった。ホテルはブラジルやカナダなど数ヶ国と同じであった。

練習会場と試合会場は別の場所となっていた。いずれの場所も手指消毒のボトルが置いてあった。会場内はやや暑かったが、試合を行うには良いコンディションであった。しかし、セルビアの3月の気候は日中でも10℃程度とやや寒い気候で屋内・屋外で気温の差があった。会場内でのマスクの着用は、基本的には多くの選手・スタッフが何らかのマスクをしていることが多かったが、トレーニング会場ではマスクなしで会話しかつ室内の試合であったので密になっていることが多かった。セルビアでは大会期間の直前にマスクなしでの生活が許可されたということもあり、マスクなしの観客が多く、応援のため叫んでいる人も少なくなかった。

4. 医療活動

期間中に大きなケガや体調不良はなかった。腰部

の違和感、足関節捻挫後の不安定症、梨状筋の張り、などの状態確認を行った。

5. ドーピングコントロール

試合の2日前に競技会外検査で血液検査が抜き打ちで早朝に行われた。その他に検査はなかった。

6. 成績

60m, 60mH で準決勝に進出した。

7. 帰国後の隔離期間について

選手・スタッフともに期間中の新型コロナに関する検査は全て陰性であった。3月22日に帰国、帰国後は決められたアプリで健康報告や居場所情報の報告を行った。3名の選手・スタッフは3日間の隔離が必要であったため、千葉県にあるリソルの森で隔離期間を過ごした。ワクチンを3回接種し2週間以上経過している選手・スタッフは隔離期間が免除となるはずであったが、帰国の機内の乗客でCOVID-19陽性者が出てしまい、その付近（濃厚接触者の定義は同じ列と前後2列まで）に座っていた選手・スタッフへMy SOSで濃厚接触者である通知が帰国翌日の18時過ぎに来たため、1週間隔離されることとなった。自宅からリソルへ移動できることを事務局より各所へ確認して頂き、1週間自宅隔離されることとなった選手は希望があればリソルへ移動できることとなった（移動は自身の自動車で行い、公共交通機関は使用できなかった）。医療従事者で濃厚接触者になった場合、検査を行うと隔離期間が短縮されるため、渡航の航空機内の発生に関しても同様の対応となるか厚生労働省（新型コロナ感染対策推進本部保健班）に問い合わせたところ、国内発生の濃厚接触者と同じ対応で調整しているところで、今回もその対応でよいことを了解頂いた。したがって、国内発生の濃厚接触者と同様に、COVID-19陽性者との最終接触日より4日目と5日目に厚生労働省が承認した市販の抗原定性検査で陰性が確認された後に隔離解除となった。

8. まとめ

コロナ禍における国際競技会への遠征であったが、世界の新型コロナに対する対応が変化してきていることを肌で感じた遠征であった。メディカルと

してはトレーナーの砂川さんと協力し、特に大きな問題なく終了することができた。スタッフが少ない中ではあったが、スタッフ・選手で協力し大きな事故なく、新型コロナに関しても大きな問題なく終了することができた。当然のことながら、選手にとって国際大会での経験というものは非常に貴重なものであり、競技力向上の観点からも出来る限り多くの国際試合に参加するために、日本も含め世界における新型コロナへの対応が柔軟になってきていることから、コロナ禍の国際競技会への遠征に関する今回の経験を今後につなげていけるよう情報共有していきたい。